

パウル・クレー作《中国風の絵》(1923)と《中国風の絵 II》(1923) の制作背景について

野田由美意 (多摩美術大学)

発表者はクレーのアジア・オリエントへの関心を明らかにする試みとしてアジア・オリエント文献蒐集期間を調べ、1909年～第1次大戦中に第1次ピーク、1919-24年に第2次ピークがあることが判明した。またアジア・オリエント関連作品の制作期として1919-24年頃に1つのピークがあることが分かった。この期間にはヴァイマルのバウハウスでの教育活動期が含まれ、同バウハウスのアジア・オリエントに対する関心の高さがクレーに影響を与えたと考えられる。本発表では《中国風の絵》(Chinesisches Bild, 1923, 235, 宮城県美術館)と《中国風の絵 II》(Chinesisches II, 1923, 235 bis, 現所蔵者不明)に注目し、従来の研究で触れられたことのない制作背景を追究することにより、当時のクレーのアジア・オリエントに対する関わりを検証する。

両作品に関しては、1954年にグロマンがもとは1つの作品だったと指摘したものの、その後この指摘が検証されることはなかった。発表者は両作品の各形態や下塗りの筆跡等を突き合わせた結果、もとの作品の左側を《中国風の絵》、右側を《中国風の絵 II》が占めていたが、クレーが制作のある時点で縦方向に2つに切断したと考える。なお、《中国風の絵 II》に関しては写真のみの調査のため、これは写真調査に基づく仮説である。

《中国風の絵》右下の男性は、両作品の他の記号的な形態に比べ際立つ存在である。クレーはこの男性をより際立たせる目的で画面の切断を試みたと推測される。他の形態の一部は、彼が蒐集した上記文献から示唆を得たと見なされる一方、この男性は頭部の特徴から仏僧を思い出させ、また仏僧としての自画像の可能性が考えられる。クレーは蔵書ヴィルヘルム訳『中国の民話』に登場する玄奘三蔵などを通じて、中国の仏僧についての情報を得ていた。またバウハウスで彼は仏陀と呼ばれていた。第1次大戦からその敗戦後にかけて仏教や道教は、ドイツ知識人の間で新しい価値観を示し得るものとして流行していた。こうした状況で、クレーはファン・ゴッホの《仏僧としての自画像》(1888)を意識していたと考えられる。この作品は1919年にバイエルン州立絵画コレクションがチューディの未亡人から購入し、38年にナチスに押収される前まで常設展示されていたこと、また19年のクリスマスにクレーは同作品の言及されたファン・ゴッホの弟への書簡集を妻に贈らせていることから、彼がこの作品を観ている可能性は高い。ファン・ゴッホは日本に彼の宗教的理想や共同体理想を投影し、そのユートピアに住む仏僧の相貌をした自画像を描いた。バウハウスもまた共同体理想を掲げてスタートし、秘教的な関心が強かった。だが一方でその頂点にいたイッテンの1923年4月の辞職が象徴的なように、バウハウスはそのような方向性から徐々に距離を置く傾向をたどり始める。クレーは切断により作品の一方を自画像として強調した。その観者に向けられた鋭くも静かな眼差しには、ファン・ゴッホの理想とその挫折を重ねて、過渡期のバウハウスとその渦中にある自身を冷静に見つめるクレーの姿が映し出されていると見なされる。